

2021. 12. 12. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書4章35～41節
『穏やかさに学ぶ』

「三匹の小ブタ」という寓話があります。それぞれ個性の違う三匹の小ブタがめいめいの家を作ります。一匹目は建てるのも楽なワラの家、二匹目は木の家、三匹目は重労働が必要なレンガの家を建てます。ある日、オオカミがやってきてワラの家はひと吹き、木の家はひと叩きで壊してしまいます。ところが最後のレンガの家だけはどうしても壊すことができません。オオカミはどうとうあきらめてしまい、三匹の小ブタはレンガの家で仲良く一緒に暮らしましたというお話です。

実はこの物語は中世ヨーロッパにおいて教会により広められました。確固たる信仰を持つ者はレンガの家のように外で何が起こっても内部は常に穏やかであるということなのでしょう。

マルコは本日の記事の中で「湖上の物語」といわれる既存の奇跡物語に40～41節というマルコ自身の神学的視点、つまり福音理解をプラスして完成させました。ここには嵐の中にある舟という密閉された状況という舞台装置の中で書き始められて行きます。

物語は本来の奇跡物語から余計な部分を削ぎ落として単純明快に仕上げられています。冒頭から湖に漕ぎ出す一行の姿が描かれます。わざわざ嵐の中に漕ぎ出す舟などないので、嵐の湖に漕ぎ出したけれども途中で雲行きがあやしくなってきたということでしょう。

この突如として平常から混乱に変えられてゆく状況とは初代教会の体験なのです。旅の途上で突然思いがけない状態にたたき込まれる、それも嵐という外的要因が弟子たちをしてイエスを揺り起こすほどの内的な混乱へと瞬時

に発展してしまいます。ここには初代教会が内包していた多くの「もめ」が集約されています。初代教会の基本的な在り方は「自由」でしたから多くの人々の流入に伴うトラブルは常にあったのです。

マルコはここで福音とは一定化した人間理解ではなく多様性の受け入れであるということを描き出します。「もめる」ということは自然なことなのです。「自由」を曲解して責任をとらないで自己主張を言いつばなしにするというのが混乱なのです。イエスはこれに対し39節で「叱る」のです。この言葉は人の持つ注意や警告ではなく、「神の側からの問い」という意味なのです。

その問いとは、「もめ」を整理し直し、互いが痛みをおぼえる責任を携えつつ、発展的に事柄につなげ、育み合う関係性を築き得るのかという問いなのです。ここに「凧」(39節)、信頼に満ちたつまり穏やかさが与えられてゆくのです。

人生は旅だといいます。しかし、古いものから新しいものへとか真実に向かってなどといいます。そんなことではないのです。それは、人生を自分のものと考えて思い通りに変えて行こうとするあさましい生き方から、与えられたものとして考えて受け止めて行こうとする旅なのではなかったでしょうか。いわば穏やかな受容への旅なのです。

イエスの十字架と復活に出会わなかったら受け入れがたかったものが、イエスの十字架と復活との出会いを通して受け入れることの出来る者へと変えられて行くということ。そこには自分の未消化の主張や欲求からくる混乱がおしなべて陰をひそめ、受け入れることの出来る感謝と祈りに満ちた穏やかさのみが残ってゆくのではないのでしょうか。